

区画整理とアーバニスト

—若き名古屋、若き石川栄耀

東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻
准教授 中島 直人



■アーバニストとしての石川栄耀

一年前に『アーバニスト 魅力ある都市の創生者たち』という本を出版した。この本では「もし都市の負債を資産に変えようとするならば、都市計画家や測量技師ではなく、より多くの「アーバニスト」と「社会企業家」が必要となる」というフレーズを引用した。都市をつくる時代から都市をともに営む、あるいは使う時代へ移行した現代日本において、今後、アーバニストとよぶべき人々が求められる。では、アーバニストとはどのような人たちのことか。私たちは、辞書に掲載されていた二つの定義、すなわち「都市計画の専門家」と「都市での生活を楽しむ人」とを重ね合わせて、それらの汽水域で活動する人とした。都市をつくるということ、都市を楽しむ（生きる）ということが一人の人の中で統合されている。そうしたアーバニストはどのようにして生み出されるのだろうか。

私たちの仮説は、アーバニストを生み出す環境質というものがあるのではないかと、いうことであった。人が都市を生み、都市が人を生む。人々が自分の力で生み出した、「かかわりしろ」の多い魅力的な場所の経験、あるいはそうした場所を営む魅力的な人々とのふれあいが、次の世代のアーバニストを

生み出すのではない。アーバニストを循環的に生み出すまちにおいて、持続的な再生が可能となる。

さて、こうしたアーバニストは何も現代になって初めて登場してきたわけではない。上記の書籍でも、アーバニストの系譜を描き出している。その中で、都市計画家からアーバニストへと活動領域を広げた人として、石川栄耀（1893-1955）を取り上げた。改めて説明する必要はないだろう。日本の都市計画史における最重要人物である。そして、石川は都市計画の草創期に土地区画整理事業の普及に大きく貢献した人物である。内務省都市計画地方委員会技師としての初の赴任地、名古屋にて、郊外の地主たちと付き合い、説得し、組合土地区画整理事業を実現していった。しかし、石川の活動は、そうした技師としての「都市をつくる仕事」には留まらなかった。石川の区画整理、さらには区画整理を超えた様々な活動は、石川の名古屋での生活と一体化し、石川ならではの様相を生み出した。名古屋での活動・生活が、石川の区画整理技術の確立を導いたのである。本稿では、アーバニストという人材像を念頭に置きながら、石川の名古屋での活動の軌跡を追ってみたい。

■若き名古屋と都市計画技師・石川栄耀

石川栄耀は、のちに「私は、その若き名古屋の伸び行く盛りに若き技師として、若気の至りの勝手を盡す事が出来た」（『若き日の名古屋』『新都市』、5巻10号、1951年）と振り返っている。石川が内務省都市計画地方委員会技師の一期生として、名古屋に赴任したのは1920年9月であった。そしてその翌年に、名古屋市は周辺16町村を編入するかたちで、市域を拡張させた。名古屋でも工業化の進展に伴い、人口は急速に増加し始めていた。石川が着任した都市計画名古屋地方委員会に与えられたミッションは、1919年に出来たばかりの都市計画法制度に基づいて、この成長都市を健全な姿に導いていくことであった。1922年に都市計画区域決定、1924年には都

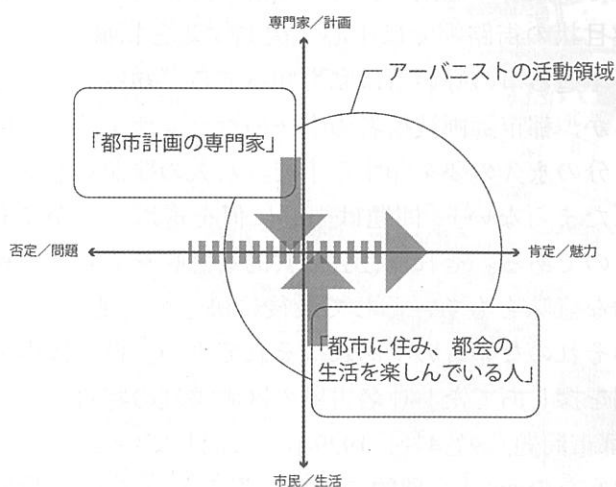


図-1 アーバニストの活動領域の生成の構図
(中島直人+一般社団法人アーバニスト『アーバニスト 魅力ある都市の創生者たち』、ちくま新書、2021年より)

市計画道路、運河、用途地域決定と順調に都市計画を決定していった。

石川はこの時期、1923年から24年にかけて、1年間の欧米出張に出かけている。欧米都市を訪問し、国際会議に出席し、数多くの都市計画家と面会した。とりわけ、イギリスの都市計画の父、レイモンド・アンウィンとの出会いは石川の都市計画観に大きな影響を与えた。石川が説明した名古屋の都市計画図を前にして、アンウィンは次のように述べた。

「君達の計画は尊敬はします。然し私に云わせればキタンなく云わせれば、あなた方の計画は人生を欠いている。私の察した丈では此の計画は産業を主体にしている。いや、主体どころではない産業そのものだ。成程カマドの下の火が一家の生命の出発点である様に産業は立都の根本問題ではあろう。それに対しては何も云わない。然し、例えて見ても一家の生活においてもカマドの火は高々一時間で消される。そしてそれから後は愉快的な茶の間の時間が始まるはずだ。産業は人間生活のカマドでしかない。むづかしく云えばそれは文化生活の基礎である。軽い語で云えば文化の召使である。あなた方はサーバントに客間と茶の間を与え様としてる」(『郷土都市の話になる迄 断章の二、夜の都市計画』『都市創作』、1巻3号、1925年)

石川はこのアンウィンの言葉、都市計画を常に人々のライフ(人生、生活)から考えるということ強く心に刻んだ。この後の石川の仕事、活動の基調をつくっていった。

都市計画の決定が一通り終わったあと、次は計画の実現に向けて実際に事業を展開していくという段階で、土地区画整理事業が主題となった。合併16町村の区域において、石川は土地区画整理組合の設立を次々と導いていった。石川が名古屋にいた1920年から1933年の間に名古屋市内で26の耕地整理組合、51の土地区画整理組合が設立されたのである。

石川の仕事は、もちろん組合設立を促す事だけではなかった。組合から依頼されるかたちで、実際の区画整理設計を担当した。石川が手掛けた区画整理設計の中でも、「自分が初めから企画し実施したのは田代である。(中略)多少快心の成果である。」(前掲「若き日の名古屋」とのちに回顧したのが、やは

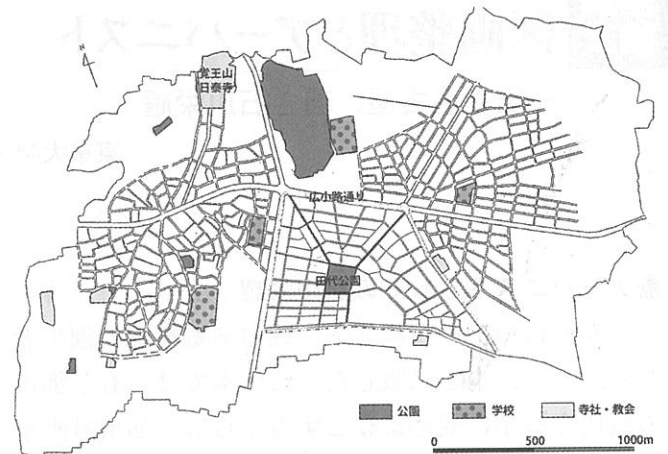


図-2 田代土地区画整理事業の設計図

(市古太郎・馬場俊介「戦前名古屋における土地区画整理制度による集落計画」『土木史研究』、14号、pp.173-182、1994年の図4・図5をもとに作成)

り1921年の合併16町村域にあたる田代地区の土地区画整理事業であった。名古屋の都心軸である広小路を東へ延長した先に広がる田代地区は、西は覚王山日泰寺の門前、東は東山に接する東西に長い地域であった。その東西の丘陵部では、アップダウンの大きい地形の等高線を読み込んだ曲線を使った街路網がデザインされた。先に進んでいた隣接する八事地区の土地区画整理事業の設計とも共通性が見られる。

田代地区でユニークな設計がなされたのは、丘陵に挟まれた低地部である。広小路の端部の二つの交差点から二本の直線道路が斜めに走り、それらは中央の田代公園に突き当たる。広小路からはさらに二本の街路が途中で合流してY字状になり公園に至っている。公園から見ると、公園を中心に放射状に街路網が構成されていることが見て取れる。石川はその設計の意図を、区画整理で通常造成される碁盤目状の街路網では中心が欠如すると指摘し、「中心を造る事の好い事は私も知ってる。知ってるどころか、都市計画技術者の唯一のヴァニティは地上に自分の永久の夢を印する事だ。永久の夢が碁盤割ではたまらない」「問題は中心に何を選ぶべきかにあるのである。それは社会公共的な意味をもち、親和的な意味をもち、そして最後に決して『他となる』おそれのないものであればそれでよい。自分は小公園を探しあてた」(『名古屋の区画整理の特質(上)』『都市問題』9巻4号、1929年)と記している。なぜ、中心なのか。「心理的に結合すること。(中略)放射循環形式に広場を適当に配する組立ての場合、各街路はそれに面する各家屋の共通前提となり従ってそ

ここに小さき Community の萌芽が発生する」(「郊外集落結成の技巧」『都市公論』13巻10号、1930年)という。石川は都市計画を人々のライフから考えた。そして、都市において、その生活が交わって、結び合うコミュニティの形成に寄与する形を探究した。都市計画家の役割を「散逸せんとする人類の結び目をより新鮮なる形式に於いて、回復する」(前掲「郊外集落結成の技巧」)ことに置いたのである。

■都市化の最前線での開かれた暮らし

さて、区画整理事業組合の設立に奔走し、区画整理設計に力を注いでいた石川は、どのような暮らしをしていたのだろうか。石川と常に近い距離にいた従弟の根岸情治が石川の急逝後に出版した『都市を生きる 石川栄耀縦横記』(作品社、1956年)には、名古屋での石川の暮らしぶりが描写されている。

1920年、独身で名古屋に赴任した石川が居を構えたのは、御器所であった。御器所は旧名古屋市と隣接する位置にあり、1909年には名古屋市と接する一部区域が先に名古屋市に編入されていた。「鶴舞公園の前で電車を降り、公園を横に突き抜けて畑の中の一本道を十分ほど歩くと鎮守の森があり、それを中心として、草ぶき屋根の多い田舎じみた場所に彼の下宿している家があった。」という。石川が下宿していたのは、「農村じみた郊外の、素人家の二階」であった。1920年当時の地形図からは御器所八幡宮

を中心とする旧集落の周囲はまだ農地が広がっていたことが見とれる。石川が公園を抜けて帰った下宿は、この周辺の農地の先にあった。しかし、耕地整理事業が進行中であった。1932年の地形図では農地はすっかり姿を消し、市街地化し、御器所の旧集落は名古屋の市街地に接続し、吸収されていた。石川は独身時代の約2年間、この名古屋の1920年代の市街化の最前線で、毎日、周辺農地が市街地になっていく中を突っ切って通勤していた。若き石川はまさに若き名古屋の先端で暮らしていたのである。

1922年、石川は予ねてから付き合いのあった女性と家庭を持った。当時の市域の外に当たる鳴子、旧名古屋市域の下町にあたる杉村にそれぞれ短期間、居を構えたあとに、1933年の東京転任後までの間、落ち着いたのが覚王山下の住宅地であった。先に紹介した田代の土地区画整理事業の区域と隣接ないし包含される一帯であった。つまり、石川はここでもその後市街化していく次なる最前線で暮らしていたことになる。田代の田園、その先の東山の丘陵地帯を日々眺めながら、設計していたのである。

覚王山下での暮らしを確認したいが、その前に、石川が『都市創作』の5巻1号(1929年)に寄せた年賀状を見ておこう。そこに記された石川の「私宅時間割」によれば、月、火、水は研究日、木曜は外出日、金曜は訪問客接客、土曜は午後が社会奉仕日、日曜日が家庭日となっている。しかし、根岸の回想



図-3 御器所周辺の市街化(1920年と1932年)

(今昔マップ on the web (<https://ktgis.net/kjmapw/index.html>) より作成)



図-4 覚王山下周辺の市街化（1920年と1932年）

（今昔マップ on the web (<https://ktgis.net/kjmapw/index.html>) より作成）

は少し違っている。覚王山下での石川の暮らしぶりについても、根岸の文章を引用しよう。

「彼の住居はこの住宅地の中の第二級程度の家屋であって（この住宅地の家屋は大、中、小と三階級に分かれていて、私も一時その小の部に住んでいたことがあった）間数は、八畳、六畳二間、四畳半、三畳というところであった筈である。

彼は八畳の客間に、床の間と云わず、窓と云わず、所かまわずビールの空箱やミカンの空箱を、そのままきたならしく天井まで積み重ね、それに本や書類をギッシリつめこんでまるで物置か倉庫のようにして、いっこうおかまいなしでいた。

次の間は居間になっていて、其処に冬は炬燵を作り、夜などは毎晩のように近所の者や役所の若い連中が集り、トランプや花合せをやったり、演劇の本読みや、短歌会や絵を画いたり、哲学や文学を論じ合ったりして、いつも大変なにぎわいであった。

それがまたいい気持に飛躍して、県庁の会議室を借り受けて絵の展覧会をやるかと思えば、ランプ座と称して演劇の素読会を催し、又、自画像という小雑誌を発刊して、短歌や俳句や雑文をのせたり、そうかと思えば、野球大会とか運動会を主催し、一面、猟奇隊という売春窟やゲテ方面の視察を行う団体をこしらえたり、なかなか多彩な生活振りであった。」

石川は自宅を地域や仕事の仲間に関き、文化、芸術、さらには運動などを通じて、コミュニティを醸成していたのである。区画整理の設計においてコミュニティの形成を目指し、日々の暮らしの中でもコミュニティづくりに励む。ここに石川のアーバニストとしてのふるまいかたがよく見える。そして、区画整理を中心においてみれば、その設計はこうした生活からの必然的な帰結であったと言えるだろう。

■社会中心としての盛り場での活動

石川の文化・芸術活動は覚王山下の自宅を飛び出していった。同時に、石川の仕事も県庁の都市計画技術室から街頭へ出ていった。向かう先は盛り場であった。石川の都市計画や区画整理への問題意識は、以下に拾った言葉から明らかである。例えば、「都市計画が法律通り、今日一日の衛生、保安、経済につつながらしめる丈の事なら楽なものだ」（『都市の味』『都市創作』2巻2号、1926年）、「都市計画といっても何も区画整理のようなことばかりするのじゃない。都市の美観ということも吾々は考えねばならぬ」（『名古屋新聞』、1928年5月2日）、「『都市計画』という華々しい名前を有ちながら自分達の仕事がどうもこの現実の『都市』とどこかで縁が切れてる様な気がしてならない」（『盛り場計画』のテキスト「夜の都市計画」『都市公論』15巻8号、1932年）である。

体感しつつ、都市計画技師として区画整理を実務の現場で一から学びながら、展開し、そして、区画整理や法定都市計画では収まり切らない社会の中心の育成を目指して、盛り場へと向かった。石川は名古屋という都市に育てられた。ただ、区画整理に限って言えば、その設計と盛り場での活動との交わりは、名古屋在任時には見られなかった。

石川において、区画整理と盛り場建設が最初に結びついたのは、大須であった。東京の転任後も、名古屋都市美協会の設立に協力するなど関わりを持ち続けていた石川は、大須仁王門通土地区画整理組合を指導することになった。石川は、都市計画東京地方委員会での部下である東京美術大学出身の金井静二を派遣し、盛り場計画を立案させた。金井の描いた計画は、歩行者の視点からの街並み形成を強く意識し、広告塔を中心とする広場（現在の大須ふれあい広場）の他に、沿道の建築物のデザインや照明、広告等まで詳細に検討した内容であった。ただ、時局がそのまま実現に至るということはなかった。

石川の区画整理と盛り場建設が最終的に結びつくのは、石川が都市計画課長、そして建設局長として立案責任者となった東京の戦災復興都市計画においてであった。よく知られているように、組合施行で実施した戦災復興土地区画整理事業のうち、歌舞伎町（新宿第一）と麻布十番において、形態としての広場とそこへ至る演出的なアプローチを区画整理の設計によって生み出したのである。名古屋の大須の盛り場の構成が、ここに生かされている。歌舞伎座を中心に据える盛り場を構想して石川が命名した「歌舞伎町」は、「新東京の最健全な家庭センター」を目指したが、歌舞伎町の広場が完成する前に石川は急逝してしまう。しかし、その後、コマ劇前広場と呼ばれるようになったこの広場は歌舞伎町の中心として定着していった。例えば、日本の広場の特徴を「広場化」という概念で見事に捉えた都市デザイン研究体による『建築文化』の「日本の広場」特集号（1971年8月）では、コマ劇前広場を「遊ぶ」という主題のもと、以下のように評価した。

「一日の仕事を終えた人びとの、暇をもてあまして
いる人びとの、映画・演劇の観賞者たちのブラブラ
歩きや、飲食、娯楽と、多様な行為への分岐点とな
り、立止まり、通り過ぎ、ひと休みする場所となる。

歌舞伎町界隈の活性化のシンボルであり、周辺を広場化してゆくための要の働きをしている」。

■アーバニストによる「自由区画整理」はあるか

最後に、もう一つ、アーバニストとしての石川をよく表すエピソードを紹介しておきたい。戦時中の上海での仕事である。1938年と1942年の二度、石川は日本軍が占領していた上海に長期滞在した。上海都市計画立案と実施のためである。その滞在中、石川は夜になると宿にはいられず、毎晩映画館をはしごし、盛り場を冷かして帰るのを日課としていた。特に、支那劇に興味を持ち、日本人が立ち寄らない地元の劇場にも足を向けた。さらに支那音楽にも惹かれ、日本人のいない茶館に毎晩のように出かけ、聞き入っていたという。石川は「ここに何となく『都市』があるような気がして」（「上海 都市計画人吉村辰夫君をしのぶ」『都市公論』24巻8号、都市研究会、1941年）とその理由を述べている。そして、通常の法定都市計画的検討に加えて、独自の「大上海都市計画歓興地区計画」を描きあげた。

若き名古屋での若き石川の経験は、アーバニストとしての石川を育て上げた。石川は後に「法定都市計画ではない、痒い所に手の届くような、腹が痛いといえど此の薬で癒るとゆう都市計画こそ、一般の者が求めてやまない」（「広義都市計画の考え方」『第五回全国都市計画協議会会議要録』、1952年）として、そうした都市計画を「建設せざる都市計画」、「誰でもできる都市計画」、「市民都市計画」、「精密都市計画」、「自由都市計画」などと呼んだ。実際、東京でも、自宅の近所の人々と目白文化協会を設立し、密度濃く「自由都市計画」を展開したのである。

石川は既存の都市計画から都市を考えたのではなく、都市から都市計画を考えた。そのひそみにならうと、区画整理を担う人材の教育において、区画整理から都市を考えるのではなく、都市から区画整理を考える姿勢が必要であろう。その姿勢が「自由区画整理」なるものを生み出すかも知れない。「自由区画整理」の担い手、つくることと生きること、その交わりを生きる人材を育てるために必要なのは、できれば若々しい活力を持つまちへと再生する努力を行いつつ、時に力強く、時に優しく、都市へ、まちへと若者を送り出してあげることである。そうして、若きまちと若き者との出会いが繰り返される。